

平城宮第 154次現地説明会資料

松村 恵司

1984年 3月24日 奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部

☆はじめに 当調査部は1984年 1月から平城宮跡第 154次調査として、内裏・第 2次大極殿外郭東部の発掘調査を行ってきた。調査地は、昭和42年に実施した40次調査区に南接する南北35m、東西85mの範囲で、調査面積は2900㎡である。第40次調査では東西65m、南北 125mの範囲を築地で区画した中から、太政官の一部と推定される磚積基壇建物群を発見しており、現在その一部に覆屋をかけ露出展示している。今回の調査の目的は、40次調査で明らかになった東方官衙の南方の状況を究明することであり、調査は現在なお継続中である。

☆調査の概要 調査地周辺の地形は、西北から東南にかけて緩やかに傾斜する丘陵東斜面にあたり、宮の造営に際して地盤の低い東南部に整地を行う。西方の内裏東外郭部分とは 1.5mほどの段差があり、北方の40次調査区とも 1m近い段差をもつ。今回検出した主な遺構は、礎石建物 2棟、築地塀 3条、掘立柱建物 2棟、掘立柱塀 4条、溝 6条などで、整地層との関係から奈良時代前半、後半、平安時代に大別できる。

調査区の西端で検出した東大溝SD2700は、内裏東方を南流する幹線排水路である。昭和 3年の岸熊吉氏の調査以来、3回にわたって調査が行なわれ(21.129.139次)、幅 2.4mの溝の両岸に玉石を積んだ石組溝であることが明らかにされてきたが、本調査区内では石組が東岸の一部に限られ、南半および西岸は素掘りのままとなる。玉石が抜き取られた可能性もあり、溝幅も 6m前後と上流にくらべて幅広になる。東西溝SD4240は、内裏内郭からの排水路で、内裏東外郭を限る築地の下を石組暗渠で抜け、今回の調査区北端近くでSD2700へ合流する。昭和41年の第33次調査の知見では、凝灰岩の切石組と推定したが、今回の調査では切石組の痕跡は認められなかった。幅 2.5m・深さ 1.8mであるが、水流の落差が大きいため底面は筒壺状に複雑に窪む。SD2700には内裏東外郭に開く門の心にあわせて橋SX01が架かる。橋脚に新旧二時期の改修がある。SD2700・4240の堆積は大きく 4層に分かれ、最下層からは天平 2年(730)、最上層からは延暦 3年(784)の木簡が出土した。また溝がほぼ完全に埋まりかかった 9世紀には、溝上に 2条の通路(土橋)が設けられている。溝の南端東岸で検出したSX02は、木樋を埋設した暗渠状の施設である。

調査区の南では東西に延びる築地(SA03)の基底部を50mにわたって検出した。築地基壇は整地層の上に粗い版築で作られ築地両脇には梁間 6尺(1.8m)の寄柱が10尺(3.0m)等間で規則正しく残る。築地の東端は後述するSD3410の西側で南に折れており(SA04)、この築地が南の官衙の北限を画す北面築地であることが判る。築地の

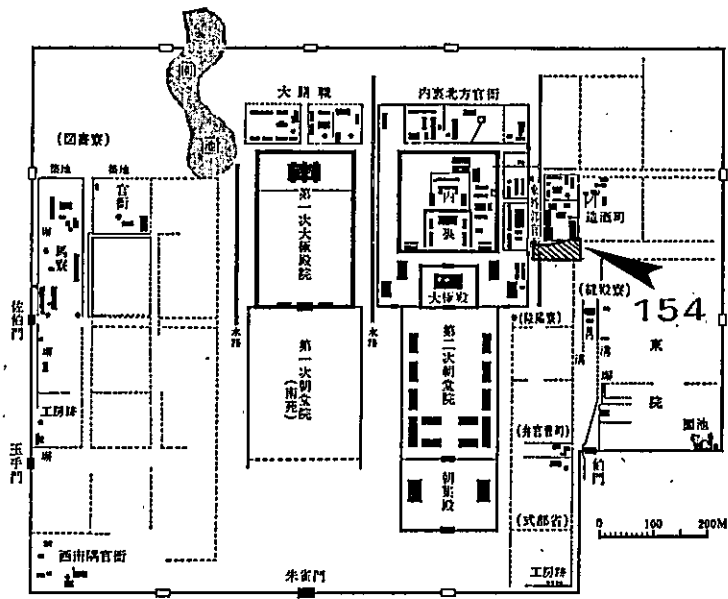
北東隅から西へ 8間目には後に門SB08が設けられている。西面築地は削平を受けているため西北隅は不明であるが、先述した木樋暗渠(SX02)上で南折する可能性が高く、東西54m前後の区画を想定することができる。築地の内部では礎石建物 2棟SB05・06と土塋SK07等を検出した。なお、築地の下層には掘立柱塀SA09があり、奈良時代後半に柱を抜き取り築地塀に改築した状況がうかがえる。

築地塀SA03から調査区北端までの南北30m間には、平安時代以降の小規模な数条の柵SA10~11以外に顕著な遺構がなく、広場的な空間(SH12)として機能していたものと考えられる。調査区の東南で検出した南北溝SD3410は、幅 5m、深さ 1mで、西岸にのみ径50cm大の大形の玉石が 2~ 5段残る。この溝は当初は素掘りであったらしく、後に西岸を改修して玉石積とし、東岸を木杭で護岸する。北端で東西溝SD15にとりつき、東へ延びる。SD15にはSD3410の東岸から渡る橋SX16が架けられている。両溝の堆積は同一で、二層に分かれ、上層には富寿神宝・隆平米宝とともに 9世紀前半の灰釉陶器が、下層には和同開珎・万年通宝・神功開宝とともに天平16年(744)の木簡が伴う。

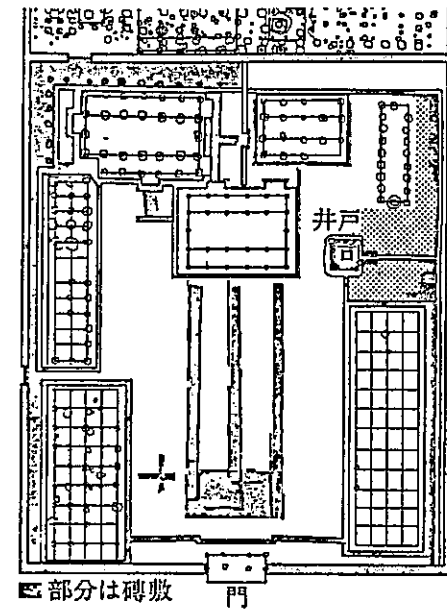
調査区北東部の遺構は40次調査で検出した遺構と一連のものである。石組南北溝SD4850は北の官衙の排水施設。本調査区内では削平を受け、底石を一部にとどめるのみとなる。SA17は 9尺等間の掘立柱東西塀。柱筋が40次で検出した南門SB5340の心にとろところから、南面築地SA2746の前身遺構と考えられる。築地削平部分で今回 4間分を確認した。他に磚積基壇下に伸びる掘立柱建物SB18がある。

☆出土遺物 東大溝とそれに合流するSD4240を中心に多量の遺物が出土した。木製品では木偶、鳴鏑、木箱、刷毛、漆塗匙といった類例の希少なものをはじめ、「左目作 今口」と墨書された人形、呪符が注目される。瓦磚類は軒瓦が 800点にのぼり、その形式は内裏周辺地域から投棄された状況を反映している。また土器類では、緑釉陶器、陶硯、土馬とともに多量の墨書土器が目をひく。他に銭貨、帯金具、海老蛸などの金属製品がある。木簡は木屑の堆積層から大量の削り屑が出土しており、水洗未了の現状では出土数を把握しがたいが、1000点を越すものと思われる。SD3410からの出土品は少ないが、瓦磚、土器類をはじめ人形、斎串、下駄などの木製品、銭貨、形象硯の蓋などがある。

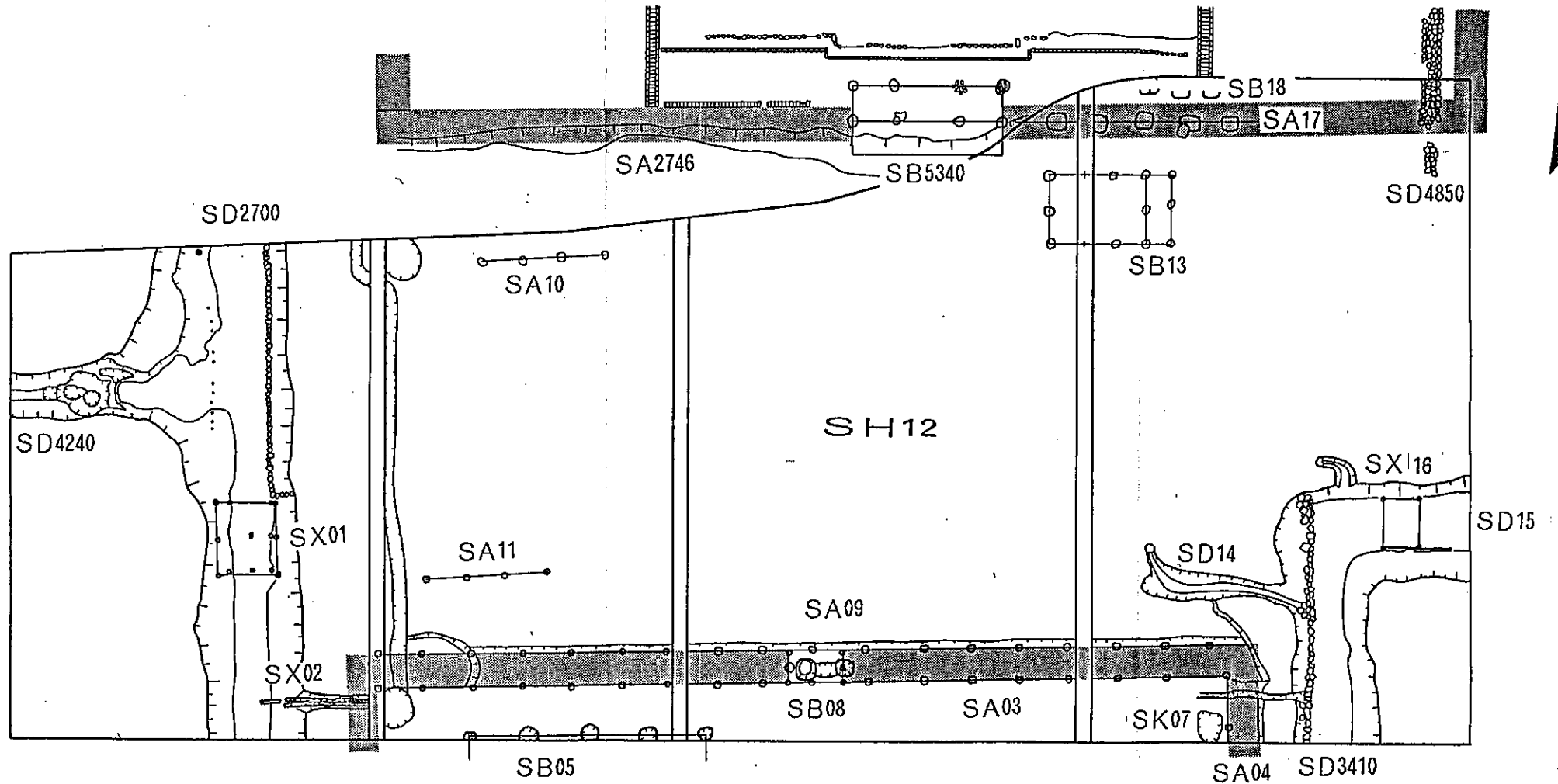
☆まとめ 今回の調査では、平城宮内裏東方官衙と大極殿東方官衙の間に南北30mにわたる広場的空間が存在することを明らかにし、あわせて大極殿東方官衙の一部を新たに確認した。また調査区東南部で昭和40年に検出したSD3410の北限を明らかにし、SD3410とSD15が東院区画に沿って延びる幹線排水路となることが判明した。さらに東大溝の構造に関しても新たな知見を得るとともに内裏関係の豊富な遺物を得ることができた。



調査位置図



40次調査遺構図



平城宮跡第 154次発掘調査遺構図

平城宮跡第一五四次発掘調査出土木簡綴文

SD二七〇〇

(1)表合自正倉給下圖坐七十六枚之中 六枚 □ □
□ 枚 □ □ □ 四 枚
廣海將 □ □
延暦二年三月廿三日付 □ □ □ □
長 379 X 幅 28 X 厚 5 ミリ 011 型式

(2) 大庭縣万呂河内国丹比郡人 坂合部女王王賣人申送已

331 X 22 X 7 011

(3)表合進廨丁一人 土師商人 鑽岐國人三木郡
延暦二年二月十九日物部又麻呂

273 X 41 X 3 011

(4)表 □物依負領納以付但馬行又如法
自今以後如法勤荷敷可進上又付便
猶并付菌守等可進上又東菌努

(裏) □ 過時改返抄
四月二日

□ 廣海連福成

(266) X 48 X 3 019

(5)表西直人六人 久米石凝 長谷マ小枚
刑マ犬万呂 □ □ 尔山門

(裏)大生乙万呂 五月四日
若倭東人

267 X 37 X 4 011

(6)表斐太十二 相模三 下野門
美濃工九 上野□十五

(裏)伊与九 四返 □ □ □ □
右七十二 上丁

(110) X 32 X 3 019

(7) 伊豆國那賀郡射橋郷和太里丈マ黒撫調荒堅魚十一斤十兩七連八節
天平五年九月

381 X 28 X 3 011

(8)表東□交易錄計總屋人服部
〔市也〕
直真吉

(94) X 16 X 3 039

出土墨書土器綴文

(9)表 □民部收
納近江大豆出

(題籤)

(裏)出帳 天平十八年 (15) X 25 X 4 061

SD三三一〇

SD三三一〇

(10)表 備中國皆多郡石成里 □ □ □ □

(裏) 天平十六年 215 X 35 X 9 033

「木」^{〔五上〕}
「口」
「足」

(11)表 大蔵 □ 壹度四月五日主計

(裏) 史生湯坐君万呂 210 X (21) X 5 011

「宮」
「造」^{〔五上〕}
「官」
「右察」
「大膳」
「所」
「内舎人」
「拘把」
「将」
「大」